



ロータリアン  
職業奉仕を語る



## 職業奉仕について考える

松宮 剛 (元RI理事 茅ヶ崎湘南RC)

「ロータリアン、ロータリー用語駆使するエイリアン」という川柳を披露された方がおられました、「職業奉仕」という言葉は、ご多分に漏れずロータリー用語の中でも使われることの多さでは、断トツと言えるのではないのでしょうか。私自身、ロータリー用語の使用は最小限とし、なるべく一般的な言葉を使って、職業奉仕について皆さんと一緒に考えていきたいと思っていますが、この川柳は、そうした私の背中を気持ちよく押してくれているかのような思いがします。

### 職業は受け手の側にこそ主導権がある

夏目漱石が1911(明治44)年の夏、兵庫県明石市で「道楽と職業」という演題で講演しました。その内容にいたく惹かれましたので、そのお話から始めたいと思います。

彼はこんなことを話しています。「昔はあって今にない商売がありました。私の幼少時は、“柳の蟲や赤蛙”などと言って売りに来る人がいました。“いたずら者はいないかな”と旗を担いで歩いてきたのもありました。子どもの時分ですから、その声を聞くと、“ホラ来た!”と言って逃げたものです。よくよく聞いてみると、ネズミ捕りの薬を売りにきたのです。人間のいたずら者ではないというのでやっと安心したものでした。……締めくくった総体の高から言えば、どうも今日の方が職業というものはよほど多い」

「昔の職業というものは大まかで、何でも含んでいる。ちょうど田舎の呉服屋みたいに、反物を売っているかと思うと傘を売っていたり、油も売るといふ」「昔は商売の数が少なかった。世間の人もそのわずかな商売をもって満足していた」「人のお世話にならないで自分の身の回りを成るべく多く足す。また足さなければならない時代があったものでしょう」「その事実をたどっていくと、一切万事自分の生活に関したことは、衣食住、いかなる方面にせよ、人のおかげを被らないで、自分だけで用を弁じていた時期があり得るといふ推測になる」

こんなことを漱石は言おうとしているのでしょう。「誰しもできれば人の世話にならないでいたいと考える。その意味では太古の人を一番理想としているが、現実にはいろいろな職業の人の厄介にならざるを得ない。しかし

一方では、私も新聞にくだらぬことを書き、講演などをしてその埋め合わせをしている」。すなわち、「自分の力に余りあるところで人一倍仕事をして、その一倍の報酬で自分に不足したところを人から自分に仕向けてもらい、相互の平均を保ちつつ生活を持続する」。極言すれば、「自分のためにすることは、すなわち人のためにすることだ」と。

さらに言えば「人のためにする仕事の分量が少なれば少ないほど、自分のためにはならない結果が生ずるのは自然の理です。これに反して、人のためになる仕事を余計すればするほど、それだけ己のためになるのは明らかな因縁である」と。私たちがロータリーでなじんできた“One Profits Most Who Serves Best (最もよく奉仕する者、最も多く報いられる)”を思い起こさせる言葉ではありませんか。

職業というものは、結局他人のニーズに合わせなければその人のためになっていないことから、必然的に「他人本位」に根本の義を置かなければならない。漱石の言葉を借りれば「取捨興廢の権威は共に自己の手中にはない」ということです。

漱石がこの講演で語らなかったことについて、幾つか触れることが、職業奉仕を考えている私たちには必要かもしれません。生活のことをほとんど自分でしていたという太古の時代から貨幣を使う現代に至るまでの職業の事情です。

昔は病に倒れたりけがをしたために、自分でしていたことを他人にしてもらう必要があったことは容易に想像できます。あることに能力のある人が多くの人のために労力を使っていたことも想像に難くありません。自分に代わってしてもらったお礼として物を返すこともあれば、別の労力でお返しすることも行われたはずで、物々交換や物と事との行き来があったことでしょう。

やがて貨幣が登場すると、お返しという性格から、提供された物や労力などの価値と等価の貨幣で「支払う」慣行が常態となりました。こうした変遷には、おそらく想像以上の時が費やされたに違いありません。

提供されたことや物が、どれくらいの貨幣価値に相当するのかは、その質と量と所要した時間、そして技術のレベル、使用した素材の希少の度合いなどによって次第

に厳密に定まってきたものと考えられます。

現代企業における取り組みも、法令順守（コンプライアンス）、企業の社会的責任（CSR）を十分に考慮した信頼を軸に、成り立つようになりました。

ここまでのお話で、「職業奉仕」について考えている私たちにとって、大切な要素が提供されたものと思います。それは、「職業というものは、元々、受け手の側に必要でかつ適切かどうかに関する主導権がある」ということです。そして、受け手のさまざまな必要性に対応することとして、いろいろな職業が生まれてきたのです。まずそのことを銘記しましょう。



## 「良い仕事」のあり方とは

職業が有している本質的な前提を私たちは共有しましたが、その実質たる仕事の質について検討しなければ、「職業奉仕」の概念には到達しないでしょう。

ここでは、『スモール イズ ビューティフル』の著者 E. F. シューマッハーの後の著作『宴のあとの経済学』（原題『Good Work』）に拠って「良い仕事」を考えてみましょう。

彼の思考の核を成していたのは、「誰であれその人生の中心となっているのは、労働であり仕事である」「この世に生を受けた人間は、ただ単に生きるためだけでなく、自己の完成を目指して働くべきである」、そして「いかなる能力を授かるうとも、それをお互いのために使わなくてはならない」というものです。

彼の代表的著作である『スモール イズ ビューティフル』では、現代産業社会の病弊を見るにつけ、小規模で、より単純であり資本を使わないで済み、環境に対して非暴力的なテクノロジーで、人間の基本的な必要性を満たす社会を実現していこうと主張しています。



つまり、制約のあるこの地球環境を前提とした中で、仕事と人間の究極の目標との間にはどんな結び付きがあるのかを問うているのです。彼は言います。「意義のある労働、良き仕事とは何かを語るには、まず“人間とは何か？”“人生の目的とは何か？”を解明しなくてはならない」と。そのためには、数百万年といわれる人類がその長い歴史を通して培ってきた「伝統（歴史）の英知」に学ばなければならないと強調しています。そして、「伝統（歴史）の英知」が指し示す良い仕事の働きを3つ挙げています。

- (1) 自分の能力を活用し開発する機会を与えてくれる。
- (2) 他人と共働する仕事に参加して、人間が生来持っている自己中心の傾向を克服できる。
- (3) 人間全てがそれなりの（道徳的に見て人間にふさわしい）生活をするために必要な財とサービスを創出する。

そして、良い仕事は、良い生き方と歩調を合わせて存在すると言っています。その良い生き方についてシューマッハーは、

- (1) 自分の社会と伝統（歴史）から学び、自分の外部の世界から教えを受け、
- (2) 自分が身に付けた知識と行動を内面化して検討し、良いものを選び、悪いものを捨て去り、
- (3) 自我や好悪の感情、自己中心の妄念を超えて、宇宙の摂理（神）を志向する

と述べています。

こうして私たちは、「職業奉仕」について考えるに当たり、2つの大切な要素を見てきました。一つは、職業が元来受け手側に主導権があり、従って受け手の意向に沿うことが大切だということ、そしてもう一つは、職業を構成している仕事は常により良いものを目指している



べきであり、それは必然的により良い人生と一体であるというものでした。

次に私たちは、これらの根底で、前提としなければならない、さらなる2つのことを見てみたいと思います。その第一は、人間というものは、例外なく不完全であるということです。つまり、家族や友人や匿名の人を含む誰かが誰かの不十分なところを補っているのです。人は、互いに支え合わなければ誰も人生を全うすることができないようにできているのです。第二に、この地球生命環境というものが決して無尽蔵で際限のないものではなく、極めて限定的なものであり、かつ全ての生きとし生けるものに平等に与えられたものであり、さらにはその地球生命環境と全ての生命は相互補完的なものだという前提です。

このような2つの前提下で人間の営みがあり、職業的な人生も当然その例外ではないということになります。

漱石とシューマッハーの指摘、そして2つの前提を念頭に、「ロータリーの職業奉仕」を見ていくこととしましょう。

「ロータリーとは何か?」。それは「ロータリーの目的」に謳われています。いわく「ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある」と。

これは明確に人間の、職業人としてのあるべき生き方を提唱したものに相違ありません。シューマッハーの言う「仕事(職業)と人間存在の究極の目標とはどんな結び付きがあるのか」という問い掛けにまさに呼応しているのではないのでしょうか。ここで重要なのは、「奉仕の理念」、かつて私たちがなじんだ「奉仕の理想(The Ideal of Service)」とは何かということです。ここで私の考える内容をご紹介しますと思います。

「人間は一人一人、この宇宙の摂理の中に生かされているかけがえのない存在である。従って私たちは、無条件に宇宙の摂理を受け入れ、慈しみ、そして自らは“共に生きるために率先して人々に仕える存在である”と深く自覚し、自分が持っている能力(心・技・体)を絶えず練磨し、その上で、他者を生かすためにできる限りの貢献をすることこそが人間の生き方として望ましいものであるとするロータリーの根本的な考え方」、従って



“The Ideal of Service”は、「サービスという考え方」と言ってよいと思います。

職業奉仕を原語では、「Vocational Service」と言いますから、字義からいえば、「職業的な奉仕」という感覚だと思います。ですから国際ロータリー(RI)は、職業奉仕の一義的なあり方として、「職業的なスキルを奉仕活動に生かす」と言っているのです。

しかし私は、職業奉仕の本質的な解釈として「職業という奉仕」、あるいは「職業は奉仕である」——職業は元来他人のためにあり、それによりよく応えていくものだという考え方を是が非でも採りたいのです。つまり私の考える「奉仕の理念(理想)」、「サービスという考え方」をそのまま職業に適用したいのです。

#### ロータリーの親睦こそが「職業奉仕」を自覚させる

職業奉仕を「職業を倫理的にコントロールしようとする行為全般」、また「高度に倫理的な基準に導かれて消費者に提供された物や事柄は、当然必要な対価を得ることができる」と定めるのであれば、何もロータリー固有のものではないということになるのではないのでしょうか。それはまさにコンプライアンスやCSRを十分に基本理念として採り入れている企業における商取引の現実に反映されているように思えますが、どうでしょう。

ロータリーはその創立当初、仕事は会員に頼もうといういわゆる「相互扶助」をする慣行がありました。そしてこのことが、その後のロータリーの拡大発展に著しい効果をもたらしました。これなしではロータリーの発展を見ることはなかったとも言えるでしょう。

ロータリーが優れていたのは、相互扶助するからにはそれぞれが自分の仕事をその職業上誇るべき実質をもって、互いに応え合おうとしたことでした。その成果は、「職業倫理訓」（1915年）として結実しました。また、アーサー・F・シュルドンの経営学（奉仕哲学）への共感と称賛にも見ることができます。

こうしたことに象徴されるロータリアンの「職業に対する強い熱意」をもって「金看板」と言われたと推察することができ、また大いに可能だと思います。実際それゆえに「ロータリーの金看板」とされたのだとも思います。

ただ私は、看過されているとおぼしき重要な点があると思っています。それは基本原則として内実に導かれるべき「ロータリーの親睦」です。以下にその原則を述べます。

(1) **一業種一会員制**：会員の異質性、あるいは多様性ということが言えるでしょう。創立当初からの一大原則でした。もちろんこの制度は、違いを味わうことがあって初めて意味を得るものです。単に職業が違うだけではさしたる意味は持ち得ないのです。異質を現実に体験し、良くも悪くも味わう機会を得てこそその多様性とその受容のことです。

(2) **毎週一回の例会への出席**：会員が最大限頻繁に会うことによって、お互いが切磋琢磨することを意味する原則です。誰しも親しい友人を持っていますが、毎週定期的に顔を合わせる友など恐らくいないのではないのでしょうか？ それほどの出会いの機会をロータリーは提供しているのです。こうすることで、会員の自己改善が行われていきます。

(3) **毎年度交代制**：例えば今年度はA氏がクラブ会報の担当だとします。ロータリーはA氏に前年度の会報担当者と同じことをしなさいとは言っていません。彼らしさが発揮されることを期待しているのです。正しい記録の記載は守られるべきですが、他は彼らしいアイデアが活かされてこそ担当する意味があるとロータリーは主張します。しかし、このような制度があるにもかかわらずクラブの活動がマンネリ化し、ある種の疲弊を見せています。つまり、「ロータリーを駄目にしようと思ったら、前年通りやればよい」ということです。その理由を含めここでは議論せず、別の機会に譲りたいと思います。

(4) **機能分担としての役務**：年度における役務の分担は、決して上下関係を示すものではないという原則です。クラブ会長はその年度の対外的なクラブの顔であり、対内的にはクラブのリーダー的な役務を担ってはいますが、年度が過ぎれば一会員たるロータリアンに戻るものであって、長老やボスの存在になるというものではありません。ましてやロータリーを卒業するわけではありません。

(5) **会費同額**：ロータリーが徹底した平等を保障するクラブ運動であることの象徴です。

ロータリーの基本原則が会員相互の交流にもたらすであろう意味が考えられることもなく、そのほとんど全てが葬り去られようとしている現実が心が痛みます。

2004 - 05年度、私はガバナーとして、『月信』にこのことを「巧妙に仕組まれた親睦の構造」と書きました。他にも伝統的なロータリーの基本原則はあるかもしれませんが、少なくともこれら5つの基本原則に導かれてロータリークラブにおける会員相互の交流が行われているべきなのです。それによって実現する切磋琢磨と自己改善のエネルギーの横溢をロータリーは望んだのです。そうしたロータリー特有の親睦による自己改善の成果は、おのずと自己の職業に対する姿勢を変化させるに違いないのです。そしてこの基本原則を生かしたクラブでの親睦こそが職業奉仕を「ロータリーの金看板」たらしめる強い力となっているに違いないのです。

先ほど述べました、企業における職業倫理を踏まえた活動とは一味も二味も違う、血の通った、人間味のある職業活動がそこには実現されていると思えるのです。職業を営んでいる当事者の周辺には、有形・無形の喜びや満たされた感覚があふれているのではないのでしょうか。シュルドンの語る“*One Profits Most*”の意味するところは、実はそのことを含んでいたのではないかと、現実としての経営学校での教育を超えて、彼の真意はそこにこそあったのではないかと考えるのです。

現状のRIはもちろんのこと、日本の多くのロータリークラブにおいて、今述べた「ロータリーの親睦」が日常から忘れ去られているように思えてなりません。そうした意味から、皆さんでクラブ例会の在り方やクラブ親睦活動の考え方、クラブ奉仕部門への取り組みを改めて見直してみたいかがでしょう。

それは取りも直さず「職業が奉仕である」ことを深く自覚するばかりでなく、人生そのものの付加価値、ふくらみと温かさを、つまるところ「ロータリーの本領」を知る契機へとつながっていくことになると思うからにはほかなりません。「これまでの殻を破ろうではありませんか！ 有為な違いを創り出すために、Rotary : Making a Difference」

(第2780地区 神奈川県 2004 - 05年度ガバナー)

本稿は、2016年4月に行われた第2780地区研修・協議会職業奉仕分科会での講演に加筆したものです。

【参考引用文献】

夏目漱石『漱石全集』第11巻 評論・雑篇、岩波書店、1985年（P9左）

E.F. シューマッハー、長洲一二監修・伊藤拓一訳『宴のあとの経済学』筑摩書房、2011年（P9右）



# 私が実践する・考える職業奉仕

## 人が育つための支援、それが私の職業奉仕

大阪東RC 島ノ内英久

入会：2014年 職業分類：経営コンサルタント

私は中小製造業の工場リーダーを育成するコンサルタントを長年務めております。

作業員や工場長の高齢化が進み、現場の世代交代が急務の一方、日々の生産に追われ、人材育成の余裕がない工場も多く、また、製造業務は真面目にこなすものの、未経験の仕事にあえて取り組む積極性に乏しい人が多いのも実情です。

そのような人たちと接するリーダーが、現場の声を生かして改善テーマを設定し、さまざまな苦勞をしながらも仲間をフォローし続け達成する経験を、改善活動などを通じて積むことで、工場、リーダー共に着実に育つことを実感しております。



雰囲気の良い現場は、働く人の気持ちだけでなく、生産性もアップ

「前向きになるスイッチは誰も必ずどこかにある」「マイナスのレッテルを貼られた人は伸びない。だからレッテルを絶対に貼らない」「役職などに関係なく平等に明るく声を掛ける」などを旨として日々支援を行っています。

人が育つための支援、それが私の実践する職業奉仕です。  
(第2660地区 大阪府)

## 全ての人に伝わるメディアを目指して

高崎北RC 内藤 賢治

入会：2012年 職業分類：印刷業

全ての人に読みやすく、使いやすく伝えることのできる印刷業で職業奉仕をしています。

人の色の感じ方は一様ではなく、色の見え方が一般の人と異なる人が多くいます。この中でいわゆる色覚に障害のある人は、日本では男性の20人に1人、女性の500人に1人、日本全体では300万人以上います。

す。これらの人たちは、色の組み合わせによっては、一般の人が見えている差異が認識できません。

バリアフリーは、障害のある人の社会参加を阻むバリア（障壁）を取り除く考え方ですが、「全ての人に伝わるメディア」という意味は、一つのメディアから全ての人が同じ情報を正確に受け取ることができる、ということです。自身の職業を通じて、印刷紙面の情報を全ての人に伝えることのできるよう、文字の形状・大きさ、色の使い方・明度差などに配慮し、全ての人々の社会生活を阻害しない印刷物で奉仕をしていきたいと考えています。  
(第2840地区 群馬県)

一般色覚者の見え方				2色型 第二色覚障がい者の見え方			
明るい茶色	オレンジ	明るい緑		明るい茶色	オレンジ	明るい緑	
赤	緑	黄色	黄緑	赤	緑	黄色	黄緑
深緑	茶色	濃い赤	焦げ茶	深緑	茶色	濃い赤	焦げ茶
明るい灰色	淡い水色	灰色	淡い緑	明るい灰色	淡い水色	灰色	淡い緑
青	紫	水色	ピンク	青	紫	水色	ピンク



色覚障害疑似ゴーグルを使って、見え方をシミュレーションする筆者（右）

## 朝のスタートは 「四つのテスト」から

佐賀南RC 吉岡 義治  
入会：2009年 職業分類：薬剤師

私の会社は、複数の薬局と職種の異なる幾つかの部門を持ち、経営しています。私自身も薬剤師として、その中で働く一員です。そういう中でリーダーとしての役目を果たすのは大変です。

そこで、全体を共通のスローガンでまとめるいい方法はないだろうかと考え、「四つのテスト」を社内で広めることにしました。上が命令、指示を出すのではなく、各自が思考し、行動する。始業は「四つのテスト」の唱和から始まります。



薬剤師として10年後も現役の写真が撮れれば幸いです  
まだまだ、成果は分かりませんが、職場が少し活気付いてきたのではないかと思います。今日この頃です。  
(第2740地区 佐賀県)

## お客さまが心から安らげる 癒やしの場を提供

神戸西RC 大澤 裕信  
入会：2009年 職業分類：スポーツ施設経営



ロータリーの職業奉仕とは「人さまのために奉仕する気持ちを強く持って職業を営むこと」だと考えます。

移民社会で「力こそ正義」という考え方が根底にあ

ろうアメリカは、銃と金が全てだったと思います。そのような背景があれば、職業奉仕に強く倫理感を求める声強いことは十分に理解できます。

その点、1000年以上、徳育を受けて今日に至る日本人には、倫理感は当然のことで、アメリカとの感覚の差を強く感じます。

私はゴルフ練習場を経営しています。阪神淡路大震災が起こった1995年、その年の9月に、神戸の地場産業のケミカルシューズ業界から転業しました。

当時すでに神戸経済には不況感がありましたが、追い討ちをかける大震災でした。単にボールを打つ場でなく、来場してくださる皆さまが心から安らげる、癒やしの場としてのコンセプトを徹底した経営をしており、スタッフには清潔、気配り目配りを常に心掛けさせています。

当施設に来られたらホッと、明日への意欲が湧くと言われる多くのお客さまの笑顔が何よりの毎日です。

(第2680地区 兵庫県)

## クラブで職業奉仕 会員の職種の幅広さを生かして就職模擬面接

2008 - 09年度から宮崎県立小林秀峰高校の電気科や商業科で就職を希望する3年生約100人に対し、就職模擬面接を行っています。高校生たちには、実践的な面接を受ける初めての機会。緊張している生徒たちに対し、一般的な質問から専門的な質問まで約20分間のグループ面接をします。専門的な質問ができるのも、会員の職種の幅広さがあればこそだと感じています。高校生は自分の希望の職種に就こうとがんばっています。今後とも地域に根差した職業奉仕の活動で、地域に貢献していきたいと思えます。

(第2730地区 宮崎県)

小林RC





## ドラッカー理論と職業奉仕

藤枝RC 石垣 善康

入会：1991年 職業分類：広告

ロータリークラブに入会して25年、当初から職業奉仕についてはあまり理解することができませんでした。また、職業奉仕についての説明も、「ロータリーの目的」の第2項の「職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会



としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること」を土台にしてあると国際ロータリーの『国際奉仕入門』に記載され、少し難解です。

そんな折、経済学者ピーター・ドラッカー（1909～2005）の理論についての研究会に参加する機会に恵まれ、数回出席している中でロータリーの職業奉仕とドラッカー理論には共通点の多いことに気づきました。

ドラッカー理論の基本：経営者は、**真摯で誠実、謙虚**であれ。＝これはロータリアンの基本。

ドラッカー：企業は本業を通じて社会的に有用な存在となり貢献せよ。社会を害するな。＝社会に奉仕する機会としてロータリアンは各自の職業を高潔なものにし、周囲の模範となれ。

ドラッカー：組織の人たちが生産的に働き、仕事を通じて自己実現できるようにせよ。＝ロータリアンは若者のキャリアアップを支援し、専門能力の開発を奨励、指導する。

このようにドラッカー理論を学ぶことで、ロータリーの職業奉仕を具体的に理解しつつあります。

（第2620地区 静岡県）

## 職業奉仕についての雑感

花巻南RC 伊藤 智仁

入会：2001年入会 職業分類：道路舗装

ロータリーでいう奉仕は service を訳したものが、奉仕という漢字の印象を表すとしたら、むしろボランティアがピッタリだと思います。しかしこのサービスとボランティアの違いを区別できないと、活動があらぬ方向に向かってしまうのではないのでしょうか。

職業とは自分の生活基盤です。レストランでおいしい料理を食べたり、良い給仕を受けた時、そこに対価があったとしても「今日のサービスに満足した」と言いません。これは仕事に対する評価です。

一方、ボランティアと呼ばれる街中の清掃活動やお祭りなどの手伝いは、喜ばれこそしますが、そもそも生

活基盤ではありません。

つまり、職業奉仕 (vocational service) とは「四つのテスト」に基づき自らの職業を通じて社会の役に立ちましようということだと思います。ゆえに、ロータリー流に解釈すれば「会員を通じて互いの職業の理解を図り、その価値を正しく社会に広めましよう。そして、各自の職業を通じ社会に役立つ行動に努めましよう」となるはずです。

（第2520地区 岩手県）



## クラブ職業奉仕委員長をして分かったこと

名古屋東南RC 鋤柄 喜彦

入会：2003年 職業分類：高圧ガス製造・販売

当然ですが、ロータリークラブに入会するまで「職業奉仕」という言葉を耳にしたことはありませんでした。

ロータリーライフが進むにつれて、その「職業奉仕」が気になり始めました。ちょうどその頃、クラブで職業奉仕委員長を引き受けることになり、初めは、委員会メンバーと共に何をやる委員会なのか、どうすれば良いのかと悩みました。

過去の活動を調べたところ、職場例会、企業訪問が実施されており、その年度も同じような事業を行いました。しかし、それが私の職業奉仕に対する考察を深めること



になりました。

「ロータリーの基本理念は職業奉仕にあり」とよく言われます。また、職業奉仕という日本語表記が意味を難しくしているのが、英語表記の Vocational Service で理解した方が良くよく言われます。さらに「四つのテスト」を検索すると、「みんな」とは、「自分に関わる人」と理解すると書かれているサイトを見つけました。そう読み替えてみると、なんとなく意味が分かった気がしました。今では、私の会社の経営理念は「四つのテスト」が基本になっています。 (第 2760 地区 愛知県)



防災訓練で講評する筆者(右)

## 職業奉仕における利己と利他

熊本北RC 倉田 榮喜  
入会：2005年 職業分類：民事弁護士

ロータリー初期の指導的人物、アーサー F. シェルドン(1868～1935)は、持続して繁栄する会社の共通の特徴を、サービスとしたとされますが、その特徴とは何でしょうか。そのサービスを奉仕と訳した場合、職業奉仕はどう考えればよいのでしょうか。

職業は利益を追求し、その利で生活する利己的なもの、奉仕は利益を求めない利他的なものならば、職業に奉仕を合体させることは、社会により有用な職業となるように努めること。さらに明治から昭和にかけての思想家・安岡正篤氏(1898～1983)の言葉にあるように、職業の利が義の総和として得られるものとなれば、職業

奉仕はまさしくロータリーの金看板と言えるでしょう。

シェルドンの言う持続して繁栄する会社の共通の特徴とは、事業の利益が義の総和になるように努め続ける会社ではないか、と地区の職業奉仕部門長になって思いました。そして利が義の総和であるかどうかを「四つのテスト」に照らして経営すると、社会により多く資する職業になるのではないのでしょうか。



(第 2720 地区 熊本県)

### クラブで職業奉仕

#### 職業奉仕を実感できた出前授業

東大阪市立楠根中学校で、1年生5クラスを対象に、3クラブ協同の出前授業を実施しました。会員のさまざまな職業・仕事を通じて、社会のいろいろな職業への知識を広げてもらおうと、製造業者、建築士、看護師、保育幼稚園経営者、大学教授(外国語)など、5人の会員が講師となり授業を行いました。30分の授業を各2回、最後に活発な質疑応答の時間もあり、生徒と共に各会員自身がとても貴重な経験をし、職業奉仕を実感することができました。(第 2660 地区 大阪府)

東大阪東・東大阪みどり・大阪ネクストRC

